

安積の平成28年度、そして17年後の創立百五十周年に向けて

前安積高等学校長 久保田 範夫

昨年7月2日の仙台安積桑野会平成28年度定期総会では、安孫子健一会長（80期）、須田昌義校内幹事（101期）ともども大変お世話になりました。現役の大学生も多数出席して、非常に心地よい充実した時間を過ごすことができましたことに重ねて御礼申し上げます。

安積の平成28年度は、修学旅行とロードレース大会が、例年と違う形での開催となったので紹介します。

修学旅行については、久しぶりの海外旅行でした。平成19（2007）年、122期生がシンガポールへ、平成22（2010）年には125期生が韓国に行っているのです、3回目の海外で、初めての台湾（中華民国）修学旅行となりました。約70万点に及ぶ古代中国の美術品及び人工品を所蔵する故宮博物院で中華文明の神髄に触れ、現地の高級中学校と交流するなど、修学旅行の名に相応しい成果を上げたと考えています。

また、校内ロードレース大会については、例年会場にしていた東山霊園（郡山市東部の田村町小川）が国・県・市の除染事業のため使用できず、大槻町の西部サッカー場をスタート・ゴールとする、広大な田圃の中を走る大槻・多田野周辺の道路に会場・コースを変更して何とか開催にこぎつけました。

ここで、校内ロードレース大会の40年を超える歴史を振り返ってみたいと思います。

昭和49（1974）年、88期生の私が3年生の時（鈴木勝枝校長先生でした）、創立90周年の記念事業の一環として、翌年の第1回駅伝大会につながるブレ大会が学校周辺コースで開催されたのが、そもその始まりです。

翌昭和50（1975）年11月8日、創立90周年（実際は、創立91周年）第1回校内駅伝競争大会が開催され、安積高―柴宮―大槻―片平―多田野―三穂田―安積町―安積高ゴールの15区間46km（!!）のコースをクラス対抗で健脚を競い、91期1年1組が2時間54分49秒で優勝を飾りました。

その後、昭和55年の第6回大会で悲劇が起きました。自転車で応援に向かっていた生徒が、暴走車に追突されて亡くなったのです。翌年の大会は、生徒への哀悼の意味もあり中止に。翌年も開催についてかなり議論したようですが、亡くなった生徒の御遺族からも、大会を継続してほしいという考えが学校に伝えられたことなどから、

最終的には大会を継続することとなり、昭和59(1984)年の創立100周年第10回大会まで続けました。しかし、交通事情の悪化は如何ともしがたく、翌昭和60(1985)年には、駅伝大会を「発展的継承」(創立110年誌)し、原則全員が約10km(共学後は、女子5kmコースを追加)を走る「校内ロードレース大会」に姿を変え、東山霊園を会場として平成27(2015)年の40回大会迄続きました。その間、平成7(1995)年には、第50回ふくしま国体のため中止となったり、平成16(2004)年には、120周年を記念して、猪苗代湖畔から安積歴史博物館まで安積疎水をたどる32kmの強歩大会(安積野ウオーク)(マラソン大会とは違い、順位競争はしなかった)とするなどの変遷はありましたが、東山で30年続いた安積の伝統行事となったのです。

東山霊園が除染事業のため使用できないと分かり、中止も含めて検討したのですが、伝統行事であり、実施することはすんなり決まりました。しかし、霊園のように、ある程度閉じられた空間というロードレースに適した場所を探すのは大変でしたが、体育科の教員が中心となり、何とか代わりのコースを設定することができ(私も何度もコースを下見しました)、PTA、安積桑野会、桜桑会の協力を得て、無事終了することができました。改めて感謝の意を表したいと思います。

**今年平成29(2017)年の干支は、丁酉(ひのと)。**私事で恐縮ですが、丁酉は私自身の干支、と言うことは「還暦」であり平成28年度末に60歳定年退職となりました。定年退職ということに免じて、**私の教員生活を振り返っての思いの一端**を少しだけ綴ることをお許しいただきたいと思っています。

昭和55年4月1日、福島県立只見高等学校教諭・新米の国語教師として走り出して以来、37年の月日が流れようとしています。学校は延べ7か所、行政職として県教育庁の4か所で勤務し、それぞれ印象深いことは数え切れないくらいありましたが、ここでは敢えて三つを挙げてみます。

#### (I) **本県初の「少子化による統合」直前の高校勤務と校歌の作詞**

平成19年4月より棚倉高等学校校長となり、同校に2年間勤務、東白川農商高等学校との統合(平成21年4月、修明高校誕生)を推進しました。両校の同窓会を始め統合に反対する空気が燦る中、統合のメリットを根気強く説明し、教職員の意識を高めながら地域住民等の理解も得て、統合にこぎ着けました。また、修明高校の校歌制定に当たり、それまで、本県の共学化等の際には、小椋佳や谷川俊太郎など著名な詩人や作家・歌手等によって校歌が作成され、「詞も曲も素晴らしいが、何となく校歌らしくない、甲子園で声高らかに歌えないな」という思いが私にはあったので、「あゝ修明 **我らが母校**」の歌詞を入れ、「棚倉」と「東白川」を新たな校名・校歌に使えないという制約の中、新生「修明」高校の校歌を長く歌い継いでほしいとの思いを込めて新校歌の作詞を

担当することができたことは、国語教師としてこれ以上の喜びはありません。

（Ⅱ）2 度に亙る母校勤務（教諭として11年間、校長として4年間の計15年間）

母校安積には、創立90周年を3年生の生徒として、110周年を教諭として、そして130周年を校長として関わり、不思議なことにとちょうど20年刻みで大きな周年行事を経験することになり、このサイクルだと、私が生きていればですが、77歳の年に150周年を迎えることになります。何らかの形で関わることでできればと思っていますが、果たしてその願いは叶うのか……。

（Ⅲ）教育行政に11年間従事するとともに、4年間の福島県高等学校長協会会長

平成10年4月より県教育庁総務課管理主事（企画担当）として「人・地域・自然と共に個を磨く新世紀ふくしまの教育」を基本目標とする「第5次福島県長期総合教育計画」新世紀ふくしまの学び・2010」の策定に当たりました。当時の総務課長は、文部科学省から出向していた茂里毅<sup>もりつよし</sup>さん（平成28年度文部科学省教職員課長）で、彼がいたからこの計画が形になったと考えています。以来、平成24年度迄、人事担当の管理主事・主幹・課長、教育次長と通算11年間の宮仕えになりました。

平成25年4月、母校安積高校の第43代校長の職に就き、同時に、県高等学校長協会会長に就任し、東日本大震災から約2年が経過した時点での難しい舵取りを任され、4年間務めることになりました。2年前に安積の130周年記念式典を挙行、100周年の際の森喜朗文部大臣（当時）に続いて、下村博文文部科学大臣（当時）臨席の下、盛会裏に終了したことは一人のOBとしても感無量でした。ただ、協会長としての出張が極めて多く、ほとんど会議が福島市で開催されるため、代理出席で対応したことも度々でしたが、郡山から約50kmの道のりを年間約120日間出張（!!）という年もあり、体育祭やセンター試験直前の激励会等、多くの学校行事に出られず、生徒・職員に申し訳ないという気持ちで一杯です。

また、高校の周年行事で祝辞を述べる機会があり、4年間で12校を数えました。どの学校であれ、何周年であれ、私が必ず話題にしたのが各高校の校歌と校訓であり、次のような趣旨の話をしました。

私は、雪が3メートルも積もる只見高校新採用時代から現在まで、新たに赴任した学校では真っ先に校歌を覚えて歌えるように心がけてきた。それは、校歌の歌詞にその学校の創立以来の校訓や精神（スピリッツ）が込められていることが多いからであり、また、声高らかに歌うことによってその学校と生徒を好きになれるから。早いもので、東日本大震災、原発事故から6度目の正月を迎えました。本県の復旧も少しずつ進んでいるように見えますが、2012年のピーク時の約16万5千人から半減したとは言え、今なお約8万人の県民が避難生活を継

続しており、小・中・高等学校・特別支援学校の多くの児童生徒が、未だに県内外で避難生活を余儀なくされている現実があります。さらに、廃炉・汚染水対策等々、原子炉に係る課題は山積し、本当に安全だと断言できるまで、この先何十年かかるのだろうと暗澹たる思いを抱いているのは福島県民だけなのではないか、と考えてしまいうことがあります。さらに農産物等の風評被害と大震災そのものの記憶の風化という二重の逆風など、様々な課題が山積しています。福島県はもとより、岩手・宮城を含めた所謂「被災3県」関連の話題も、時折全国版のニュースで取り上げられることもあります。全国的に見れば大震災の「風化」は止めようがないようにも感じられます。福島県の復興はいまだ途上にあることを忘れず、国の教育改革の激流に流されずに、福島の未来を担う子どもたちにとって、より魅力ある高校づくりに取り組む校長さんたちを陰ながら支えていきたいと考えています。

さて、**安積は平成29年度に創立133周年を迎え、学校祭である紫旗祭が130周年以来の開催となります。**私は退職となりますが、七州の覇と称えられるに相応しい安積高校にしていくこと、更に大きくなっていく「安積の殿堂」を日本一揺るぎないものとする、この二つを念頭に置き、創立150周年を見据え安積の教職員一同しっかりと努めてまいりますので、これから仙台安積桑野会の皆様からの温かい御支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。